

記 事

例会記録

**第38回神奈川地方会秋季例会・日本医史学会9月
学術例会合同例会** 平成23年9月10日(土)
鶴見大学歯学部3号館2階3-1

一般講演

1. 心臓カテーテル法の発見 佐分利保雄
2. 森鷗外と横浜市歌 荒井保男
3. 釈迦時代における出家僧の健康管理について 杉田暉道
4. 関寛斎流の医の倫理 関根 透, 島田道子

日本医史学会10月例会 平成23年10月22日(土)
順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 江戸期在村医の医療行為における製売薬
～岡山県邑久郡中島家文書の調査から
梶谷真司

2. 東京・青山霊園ハルツホルン(Henry Hartshorne :
華爾都保崙; 乞治呵倫)の墓 樋口輝雄

日本医史学会11月例会 平成23年11月26日(土)
順天堂大学医学部10号館2階203番教室

1. 江戸期在村医の医療活動
～岡山県邑久郡中島家文書の鍼灸記録から
松村紀明
2. 精神科医・小林靖彦(1919-2007)が遺した精
神医療史資料の意義を考える 橋本 明

例会抄録

精神科医・小林靖彦(1919-2007)が遺した 精神医療史資料の意義を考える

橋本 明

精神科医・小林靖彦(1919-2007)は、戦後のわが国における精神医療史研究のバイオニアの一人である。2008年夏、筆者は名古屋市にある旧・小林邸を偶然発見し、彼の研究資料が残されていることを知った。その後、遺族の好意によってすべての資料を譲り受け、小林資料の分析を開始した。2011年10月、愛知県立大学で第15回精神医学史学会が行われ、筆者は同大会の主催者として「小林靖彦回顧展」を企画した。彼の業績と日本の精神医療史研究への貢献について検討した

がら、小林資料分析の成果を写真やパネルにして展示した。そこで、精神医学史学会の回顧展での検討を踏まえて、筆者のこれまでの小林資料研究の一端を紹介したい。

1919年に千葉県に生まれた小林靖彦は、1944年に名古屋帝国大学医学部を卒業したあと、杉田直樹が主宰する神経精神科教室に入局し、その後、岐阜少年鑑別所所長、公立陶生病院精神科部長(愛知県瀬戸市)、名古屋市立大学医学部精神医学教室助教授などを歴任した。小林の精神医療

史に関わる最初の業績は、名古屋市立大学助教授時代の1963年に出版された『日本精神医学小史』である。しかし、本格的に精神医療史のフィールドワークに没頭するのは、1972年に名古屋第一赤十字病院精神科部長になってからである。これから約10年間、50歳代はじめから60歳代はじめころが、小林の精神医療史研究のピークだった。1979年に出された『現代精神医学大系 第1巻 A 精神医学総論 I』のなかに収められた小林の代表的な業績「日本精神医学の歴史」はこの時代に書かれた。名古屋第一赤十字病院を退職したあと、浜松の三方原病院、次いで掛川の小笠病院的顧問を務めた。その後、体調を崩し、2002年に娘夫婦の住む北海道・旭川に移り住み、2007年にそこで亡くなった。

小林の著作の背後には膨大な資料がある。彼は全国を巡って集めた資料をこまめに整理して、自分が自由に設定した研究テーマ（たとえば「温泉治療」「愛知県の精神医療史」などなど）ごとに「アルバム」（通常の写真アルバム）を用意し、そこに自分が撮った写真や他の文献から写した写真、文献コピーや新聞の切り抜きや自らのコメントを貼り付けた（だが、アルバムに整理しきれなかった資料や写真も大量に残されている）。

小林の精神医療史研究の大きな特色は、調査対象をまずは都道府県単位で考えるということであった。すべての県をまったく同価値の対象物と捉え、しばしば歴史家が陥りやすい、「中央と地方」「帝国大学と地方の医学校」「近代と伝統との間の軋轢」といったスタンスで、精神医療史を理解することはなかった。むしろ、小林の思想を貫いているのは、江戸時代からの幕藩体制を引き継いだそれぞれの県は、他の県と類似の機能と構造を持ちつつ外部から独立したマイクロコスモスであるという（近代化ではなく）いわば前近代（近世）の論理である。したがって、小林の調査対象には、常に江戸時代の藩があり、その藩で作っていた医

学校、そこから派生した明治時代の医学専門学校、そして医科大学、大学医学部という展開が含まれてくる。しかし、このルートには乗らなかった病院や、民間の施設、神社仏閣での治療所なども、県という単位のなかでは互いに同価値のものとしてすべてが調査対象になってくる。小林が作成したアルバムは、このような思想を色濃く反映している。

最後に、小林靖彦の精神医療史研究の意義をまとめたい。まず、小林の集めた資料が戦前と現在との間の空白を埋める役割を果たしているということである。1960年代から1980年代にかけての国土の急激な変化は、精神医療にかかわる戦前の「遺産」にも大きな影響を与えたはずである。小林は急激に変化する時代にあって、消えつつある全国各地の「遺産」を記録していた。次に、小林は「日本の精神医療史」ととどまらず、各地域の歴史を記述していた。既に述べたように小林の研究は、明治以降の日本の歴史を、西欧近代化・中央集権化の歴史と捉える近代化の論理とは違い、むしろ、非中央集権主義、地域主義の視点から理解しようという前近代の論理に連なる、ユニークな精神医療史の枠組みと言えるかもしれない。もちろん、小林の研究には限界がある。個人の猟奇的な蒐集癖から発しているという面が大きいかもしれない。しかし、限界を一番感じていたのは小林自身だろう。小林は、精神医療史をやめた理由を親族に次のように説明したという。「個人の力でチマチマやっても大した仕事はできない。関西方面の大学でこれから本格的に医学史研究のプロジェクトを立ち上げて調査をするようだ」と言って、途中から「城めぐり」に転じてしまう。

小林靖彦は精神医療史から身をひいてしまったが、残された膨大な資料は新たな精神医療史研究のフロンティアを切り開く大きな可能性を秘めて今なお輝きを失っていない。

(平成23年11月例会)